

# 目次

|     |                        |   |
|-----|------------------------|---|
| 85  | 巻頭言                    | 辰野 勇  |
| 86  | 連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第13回 | 日本列島を行脚する…山極 壽一                                     |
| 88  | 連載「今日もOSARU日和」第3回      | おーい、キュータロウ…竹下 景子                                    |
| 90  | 連載「生態学者が往く」第9回         | 鹿児島・奄美大島の旅…湯本 貴和                                    |
| 92  | 連載「野生動物を遺伝子から見る」第4回    | サルの父親を判定する…村山 美穂                                    |
| 94  | 連載「野生動物のおなかの中の秘密」第4回   | 草食動物の飼育は簡単？植物の武装を解除する動物…牛田 一成                       |
| 96  | 連載「大型類人猿探訪」第16回        | チンパンジーのお世話…林 美里                                     |
| 98  | 連載「ウマ学ことはじめ」第16回       | ヒトの心を読むウマ…山本 真也                                     |
| 100 | 連載「自然と芸術」第13回          | 質感を描く…小野塚 佳代  |
| 102 | 連載「海外生息地調査」第16回        | ボノボのメスを怒らせてはいけない<br>- オス間の急激な順位変動を引き起こしたメスたち…徳山 奈帆子 |
| 104 | 連載「動物園・水族館だより」第7回      | 子どもの自然を取り戻そう！…西垣 吉春                                 |
| 106 | 連載「環境教育実践」第15回         | 実習でフィールドワークを体験する…福島 誠子                              |
| 108 | 身体障害をもつチンパンジーとその仲間たち   | 櫻庭 陽子   |
| 110 | チンパンジーの寿命              | クリスティン・ハーバーキャンプ<br>平田 聡                             |
| 112 | ご寄附のお願い・イベントのご案内       |   |

## ■表紙の言葉

「水藻すくい」と名付けられた行動である。小さな池にアオミドロのなかまの水藻が浮いている。それを棒ですくって食べる。木の枝や草の茎を折りとって作った棒である。人差し指と中指のあいだにはさむのがチンパンジー流の握り方だ。西アフリカ・ギニアのボソソウの群れで最初に見つかった道具使用で、親から子へと引きつがれる文化的行動である。水藻を食べているのはペレイと名付けられた撮影当時 10 歳の若い男性だ。母親はパマ。ペレイの下にはもう子どもがいなかったの、大きくなってペレイはよく母親と一緒にいた。2013 年 9 月に、パマとペレイの親子と群れの最長老の男性テュアが、突然、姿をくらました。最後に 3 人の姿を目撃したのは、ボソソウから「緑の回廊」と呼ぶ植林地帯を通ってニンバ山の麓の村セリンバラだった。村はずれの太木に 3 人がベッドを作っていた。男性や年寄りの女性が群れを出ることはまずない。何か事件に巻き込まれたのかと思う。元気なころのペレイの姿を捉えた貴重な一枚になった。撮影は英国の動物写真家アヌップ・シャーとフィオナ・ロジャースである。(京都大学高等研究院特別教授・日本モンキーセンター所長、松沢哲郎記)

# 巻頭言

## 辰野勇（株式会社モンベル代表取締役会長）

「人はなぜ冒険するのか？」

幼い頃から山に憧れ、高校時代に会った一冊の本、ハインリッヒ・ハラー著『白い蜘蛛』に触発されてアイガー北壁を史上最年少の 21 歳で登攀に成功しました。そんな命がけの「冒険」を自ら実践しながら、なぜ人間は命のリスクを負ってまで「冒険」という行為に突き進むのか不可解でした。

「ゴリラやチンパンジーは冒険するのか？」

山極壽一総長や松沢哲郎先生にお聞きしましたが、答えはきっぱり「ノー」でした。「あの岩の上においしい果物がある」というのなら、危険を冒しても未踏の岩壁をよじのぼるかも知れないが、誰も登ったことがないから登ってみたいなどという酔狂なチンパンジーはいないと断言されました。

「さすれば、冒険とは人間だけに与えられた特性なのか？」

私の野生動物への関心は、「人が何たるか」を考える興味の対象でもあります。火をあやつり、道具をあやつるすべを身につけた人間はすさまじい進化を遂げてきました。「冒険」という行為がその進化の先端を切りひらいてきたに違いありません。

2016 年 8 月 6 日、京都大学時計台記念館で開催された毎日新聞社主催の「マナスル登頂 60 周年記念シンポジウム」での基調講演を依頼され、松沢先生と対談させていただきました。その後、先生に犬山のモンキーセンターを案内いただき、霊長類に対していっそう興味をもつようになりました。

モンベルは私が独りで 1975 年に創業した総合ア

ウトドア用品メーカーですが、野生動物の研究活動に必要な装備の共同開発などのさまざまな分野でお手伝いができることを知り、公益財団法人日本モンキーセンターおよび京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院との包括連携協定を締結させていただきました。協定のテーマは「アウトドア 7 つのミッション」と銘打ったモンベルが掲げる社会貢献事業が根幹です。

- 1、自然環境保全意識の醸成
- 2、野外活動を通じた子供たちの生きる力の育成
- 3、健康寿命の増進
- 4、防災及び災害時における対応力
- 5、エコツーリズムを通じた地域経済の活性化
- 6、農林水産など一次産業への支援
- 7、高齢者や障がい者のバリアフリー支援

さらにこのたび名誉にも、少年時代からの憧れだった京都大学の特任教授を拝命しました。もとより野生動物の分野における専門知識が希薄な私は、「冒険」を実践してきた当事者としての経験を活かし、自らの野生の感性を駆使して次世代を担う若者たちのお役に立つことができれば幸いです。



辰野 勇 たつの いさむ

株式会社モンベルの創業者で代表取締役会長。京都大学野生動物研究センター特任教授。アイガー北壁とマッターホルン北壁の登頂者。黒部川を源流から河口までカヌーで初下降。2019 年にマッターホルンにヘルンリ稜から 50 年ぶりに登頂した。著書に『カヌー&カヤック入門』『軌跡』など。2014 年から月刊誌『岳人』をネイチャーエンタープライズから発行している。